

## そのころの

### 江崎玲於奈博士

久永省一



前列左から2人目・江崎博士  
同3人目・里井先生、4人目・玉松先生  
後列左端・上田先生（高校教頭）

そのころというのは、もちろん江崎氏の同志社中学時代のことである。みんなに包まれ、みんなの中の一人であった若き日の江崎氏を描くのに、博士とか、氏という呼称はふさわしくないような気がする。昔のように、江崎君と呼んだ方が親しみも湧いてくるし、また語りやすい。

江崎君たちが同中に入学したのが昭和十三年。私が高橋勘、里井陸郎、貞方敏郎の諸先生といっしょに同中の教師になったのも同じ年であった。そのころ、各学年に会話組というのがあった。一年の成績で、生徒をふるいわけ、四組の中に一学級、優秀なクラスをつくっていたのである。会話組というのは、とくにこの組だけ会話を教えていたというのではなくて、優秀組という呼び名をカムフラージュするためのものであった。私が中学在学中の昭和の初期には会話組がなかったのだから、昭和十年ごろからはじまった制度なのかもしれない。現在では、そのような差別は許されないことであるが、当時は私学として進学成績をあげるための手段として、やむをえずとられた方法なのだと思う。

江崎君はこうして二年C組という会話組にすんだ。この組はそのまま三・C、四・Cへとまとまりを見せつつ、成長していった。彼らはよく勉強したが、決してガリ勉の方ではなかった。クラブ活動で活躍する生徒も多く、クラスの中で無邪気ないたずらなども起こったりして、明るいムードが彼らを支配していた。たとえば級長のA君はブラスバンドのリーダー格で、分列行進の際に、大鼓を叩きながら、いつも先頭に立っていた。また副級長のH君がホザナコーラスのサブ・リーダー、クラス委員のY君がそのホザナのリーダーであったというように。同じクラス委員の江崎君もその三人と仲良しで、行動をともにし、H君やY君の家によく遊びに行ったり

していた。夏休みになると、彼らは若狭の和田海岸に海水浴に出かけたり、また信州の高地へ旅行したこともあった。そんなわけだから、A君の眼から見れば、いつ勉強していたのかと不思議に思えるほどだった。それでも江崎君の成績がいつも抜群であるので、彼は頭がひじょうに良くて、教室で教えられる先生の言葉を完全に咀嚼し、消化し、記憶の箱の中に封じこめていたのだらうと言われていた。しかし夜はやはり、コッコツと勉強していたのであろうし、それに三年の途中から、補習授業にも顔を出していた。

この補習授業というのは、英語、数学、国語の三科目をベテランの先生方が放課後に、受験希望者を集めてされていた特講のことである。英語は柳島先生、数学は森田勘太先生、国語は気鋭の里井、島村の両先生が当たっていた。先生の都合によって朝の礼拝の前に行われることもあって、江崎君たちが午前七時に登校することも断続的に続いていたわけである。こういったことの積み重ねが、頭脳の明晰さと相まって彼を四年から三高に送ることになったのだらう。当時、四年から三高に入学することの難しさは言うまで

もないことだが、同中にとって、これは決して破天荒なことではなかった。なぜならその前年に、私が担任をしていた四年B組から、K君とI君の二人が三高を受験し、合格していたからである。

先にのべたクラスでの無邪気ないたずらというのは、その一つをとって言えばこういうことである。この組に副級長のH君ではなく、も一人のH君がいた。彼は体が小さく、人が良く、人気もあったのだが、彼には妙に外の生徒から、いたずらの対象にされるような要素があった。たとえば、そのH君が教壇の上に寝かされて、カバンが三つも四つも積まれて、その上からA君らが覆いかぶさってゆくのである。下敷きになったH君はヒヒイ言ってるわけだが、江崎君は三番手ぐらいで、この圧迫組の一人に加わっていた。

江崎君は大柄で、運動神経が発達していた。瘦身の感じではあったが、下級生のころから体は大きい方だった。当時、一年生から武道が必須科目で、柔道が剣道のどちらかを選択せねばならなかった。そして彼は柔道の方をえらび、異色ある白人の柔道教師の粟生助世夫（アオ・ジョセフ）氏の指導を受け

た。その柔道に階級があつて、白帯から青帯、つづいて茶色から黒帯へと進級するわけだが、二年生のとき、江崎君が青帯にうつったのは頭抜けて早い方であつた。

このように頭が良く、体力もあつた彼がなぜ一中の受験に失敗したのか。それは比較的、軽いものであつたが、彼の吃音のせいであつたと思われる。級友同志で対話するとき、さほどでもなかつたが、緊張するような場面にぶつかると、それが表面に出た。彼が教練の時間に、分隊長や小隊長をやつたとき、彼の口から号令がつまりながら爆発的にとび出したりした。柳島先生の英語の時間、先生の質問に誰も答えられないときに、その矢が最後に江崎君に向けられるのが普通であつた。そのとき彼は苦しうに、しかめ面をして、どもりつつ、しかし正確な答えを返したのである。江崎君の一年の担任は久保政義先生、二年生のときは亀井先生。彼は伊賀の上野の素封家の子息で、眉目秀麗の貴公子であつた。支那事変の最中であつたが、リベラリストである彼の言葉やムードは江崎君らの心に食い入っていったにちがいない。ところが彼は着任後、半年もたたないうちに病気で

亡くなった。やむなく私がそのあとを他の組と兼務の形で担任として受けついで。しかしそれは無理なことで、後に軍事教官の山本先生と担任を交替した。元軍人であるこの先生は温厚篤実な人格者であった。三年は高橋勲先生であったが、先生は間もなく出征されて、残りの期間と、四年生を玉松公叙先生が受け持たれた。たとい戦争中であっても、チャペルの礼拝をはじめとして、校内のあちこちに滞留していた自由な空気が、それに何人も自由に人間味のゆたかな担任の先生方の影響が、彼の人間をつくっていったのだろう。

四年生のあるとき、A君と江崎君が対話をした。A君は卒業後、予科練に入隊したほど、時代の影響をまともにその思考に受けていた。そのとき江崎君はこう言った。

「この戦争はきつと終わるよ。必ず平和な時代が来るよ。戦争のない時代がきつと。」

するとA君がこう答えた。

「そんなことはない。よし終わったとしてもまた起こる。戦争は十年ごと起こるさ。」  
話が女性のことについてゆくと、A君がこう言った。

「ぼくは結婚しない。戦争がつづくであろ

うし、女房をほっておいて、戦争にゆきたくはない。」

すると江崎君ははっきりこう言った。

「ぼくは妻をもらう。戦争はきつとなくなるから。」

学士院賞をもらったとき、江崎博士が「私の人間をつくったのは同志社中学時代だ。」と言ったのも、これであらうなずけるのである。

三高に入学したとき、彼は家庭教師をした。三年間、同中生であった一人の生徒だけを彼は教えた。軽い吃音であったために、家庭教師をすることを遠慮していたのだが、彼の錦林小学校時代の六年の担任のK先生が、そのKという生徒の修道小学校時代の担任と同じ人であったことから、二人は偶然に先生の家で出会った。それが二人の結びつきを生んだのだった。

十余年前、江崎博士がソニーの会社で、エザキ・ダイオードを発明して、神様扱いの待遇を受けていたころ、K君は博士に手紙を書いて、会社見学を依頼した。その返事がすぐ送られてきた。

「拝復 久しぶりの御手紙、なつかしく拝見しました。貴君も御元気で御活躍の御様

子、結構です。御両親は如何しておられますか。たしかお父さんはS研究所で御仕事をしておられましたね。

会社に来て戴くこと大いに結構です。御待ちしております。八月は一日から四日まで会社が休みですので、それ以外の日がよろしい。会社にくる日が生まれば御知らせ下さい。トランジスタの工場でも、見物して戴ければよいのではないかと思います。

京都には母が健在で、一人住んでいます。兄は戦時中に亡くなりましたが、弟が一人おり、神戸の川崎重工にいます。では何ずれ、お眼にかかってお話ししましょう。

昭和三十七年七月十五日

世田ヶ谷区東玉川町四五 ときわ荘

江崎玲於奈

このあとK君をふくむ数人の人が博士の案内で、ソニーの会社を見学した。しかもそのあと大変な御馳走の饗応を受けたということである。博士にはまったく関係のない人たちまでが……。まねのできない、ほのぼのとした暖かさ、掬すべき滋味がそこにあった。

(中学校教諭・英語)